様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：２４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０４９２

研究課題名（和文）東南アジア大陸部北部地域の諸言語の地域特徴と接触による言語変容の研究

研究課題名（英文）A Study of Linguistic Features and Language Contact in the Northern Mainland Southeast Asian Languages

研究代表者
林　範彦（HAYASHI, Norihiko）

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：４０４５３１４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：東南アジア大陸部北部地域に分布するチベット・ビルマ(TB)諸語およびタイ・カダイ(TK)諸語を中心に現地調査を進め、基礎語彙についてはTBでアカ語やロロポ語・チノ語をはじめとする6言語13方言、TKについてはタイ・ダム語、セーク語・プータイ語のデータ収集と録音を行った。また継続してそのうちの7言語については文化語彙や生態環境に関する語彙データの収集および基本文例データの収集も進めることが出来た。
　このことにより、特にアカ系諸語やチノ語の歴史的発展、タイ系諸語との接触、各言語の語構成に関する分析が進展した。今後は各言語のデータ公開を進め、さらに音韻・形態面における地域的特徴の解明を進めていく。

研究成果の概要（英文）：This project made itself promote the linguistic fieldwork on Tibeto-Burman and Tai-Kadai languages spoken in Northern part of Mainland Southeast Asia, and collected basic lexicons of six Tibeto-Burman languages (Akha, Akeu, Jino, Lahu, Sida, Phunoi) and three Tai-Kadai languages (Saek, Phu Thai, Tai Dam) which are all recorded as digital sound files. As for the seven languages among those, the lexicons on cultural and ecological domains and basic sentences are collected as well.
　This research led to the analyses on the historical development of Akoid languages and the Jino language, on the language contact with Tai-Kadai languages, and on the word-formation of each language above, which are successfully concluded. In future research, the lexicon data will be publicized and the areal feature of phonological and morphological domains will be studied in more detail.

研究分野：記述言語学、歴史言語学

キーワード：東南アジア大陸部　チベット・ビルマ諸語　タイ・カダイ諸語　記述言語学　歴史言語学　言語接触　言語変化

１．研究開始当初の背景

(1)東南アジア大陸部北部地域の言語状況について

中国雲南省・ラオス北部・タイ北部・ミャンマー北部を包摂する東南アジア大陸部北部地域にはタイ・カダイ諸語を中心に、チベット・ビルマ諸語、フモン・ミエン諸語、モン・クメール諸語を話す民族がモザイク模様のごとく居住する。20 世紀の前半まではタイ系民族の地域国家が繁栄していたため、当該地域ではタイ系諸語が一種の地域共通語として機能していた。平地に主に居住するタイ系民族の一方で、山地に居住するチベット・ビルマ系および他系統の民族の言語はタイ系諸語の影響を受けつつも、自言語の体系を大きく崩すことなく保持してきた。

20 世紀後半以降、中国・ラオス・ミャンマーの国境が確定し、各国政府が直接的に諸民族を支配すると、各国の公用語(漢語・ラオ語・タイ語・ビルマ語)の影響力が教育等を通じて諸言語に浸透し、高級語彙のみならず、基礎語彙や基本的な文法事項に至るまで構造変容が確認されはじめた。特に中国雲南省やタイ北部では教育の普及により、若年層を中心に少数民族の母語が公用語に取り替えられ、系統の区別を問わず、少数言語の消滅が非常に危惧されている。

(2)東南アジア大陸部北部地域の諸言語の先行研究

20 世紀初頭から当該地域の少数言語の記述がわずかながら存在し(Davis 等)、中国(馬学良、戴慶厦など)・西洋(Matisoff, Diffloth, Hansson など)・日本(西田龍雄など)が研究を蓄積してきた。

しかし、その総量は東南アジアの主要言語であるタイ語やビルマ語、ラオ語に比べて圧倒的に少ない。特に中国における研究は従来の漢語[中国語]文法の枠組みを無批判に少数民族言語に適用しただけのものが多く、言語実態に即した記述がなされることはなかった。本研究で取り扱うアカ語格朗和方言は西田龍雄により、タイ国のビス語と言語的に近く、歴史的観点からも重要であると指摘されながら、未だに詳細な研究が存在しない。またラオス北部やミャンマー北部地域のチベット・ビルマ諸語に至っては、近年ようやくいくつかの有力な記述が現れはじめた段階であり(Sawada 1998, Kato 2008 等)、萌芽期に属すると言えよう。

(3)東南アジア大陸部北部地域のチベット・ビルマ諸語研究における現状と課題

本研究代表者はこの現状に鑑み、中国雲南省南部のチノ語悠楽方言・補遠方言を中心に、言語実態に即して包括的に記述すると同時に、その歴史的変化の分析を行ってきた。チノ語悠楽方言が名詞句では孤立語的特徴を持ちつつも、動詞では膠着語的特徴を併存させていることが判明した。またミャンマー国境に近いアカ語格朗和方言の基礎語彙・文法項目を調査し、すでに音韻論と格標識に関する分析を 2 回の国際会議(International Conference on Yi-Burmese Languages and Linguistics, Himalayan Languages Symposium) で発表した。中国雲南省と国境を接するラオスとミャンマーにてシダ語・プノイ語の予備調査、アク語・ラフ語の録音データ採集を行ってきた。

これまでほとんど記述調査も分析も、また他言語と比較・対照もされることのなかったこれらの言語は当該地域の民族移動や民族の接触を解き明かす重要な事実を含んでいる可能性がある。これらの言語を継続的に調査し、記述・分析を進め、国境をまたぐ他言語との比較・対照を言語接触論・類型論の観点から研究することは急務であった。

２．研究の目的

中国雲南省・タイ北部・ミャンマー北部・ラオス北部を包摂する東南アジア大陸部北部地域はタイ・カダイ系言語を中心に、多様な少数言語が話されている。それら少数言語は消滅の危機に瀕する状況にありながら、記述言語学的および歴史言語学的研究が未だ不十分である。

本研究はまず同地域のチベット・ビルマ系言語(特にチノ語・アク語・シダ語等諸方言)の記述研究を進める。更に共存する同系統および他系統(タイ・カダイ系、モン・クメール系等)の言語との比較を通じて、東南アジア大陸部北部地域の諸言語の地域特徴と接触による言語変容の解明を目指す。

３．研究の方法

研究代表者は 2014 年度に在外研究制度を利用し、タイ王国マヒドン大学アジア言語文化研究所に拠点を置いて、東南アジア大陸部北部地域の現地調査を繰り返した。翌年度から 2016 年度にかけてはそのデータ分析・整理を行うことで、同地域のチベット・ビルマ諸語およびタイ・カダイ諸語の共時的体系や通時的変化に関する分析を進めた。また並行して、中国雲南省・ラオス北部・タイ東北部において、補充調査を断続的に実施した。

2014 年度の現地調査はアカ語諸方言(アカ・ブリ語、アカ・チチョ語、アカ・ピソ語、アカ・チェピャ語、チェンマイ方言)、シダ語、プノイ語、ロロポ語、タイ・ダム語、セーク語、プータイ語、チノ語（悠楽方言・補遠方言)、アク語(チャイントン方言、モンハイ方言)、ラフ語などにわたる。各言語で基

礎語彙 500 項目の収集と録音を行った。

上記のうち、2015 年度・2016 年度においては、アカ・ブリ語、アカ・チチョ語、ロロ・ポ語、セーク語、プータイ語、チノ語悠楽方言、アク語モンハイ方言の補充調査を行い、音韻論的・形態論的分析を進めた。

基礎資料の収集が進んだことにより、特にチベット・ビルマ諸語において同系諸語間の比較言語学的分析も進展した。また言語接触論的観点を取り入れることにより、各言語間あるいは他系統の言語からの影響について分析を進めてきた。

４．研究成果

研究成果としては主に雑誌論文と学会発表の 2 方面に集約される。

雑誌論文については未公刊のものを除いて、下記に掲げる 6 件を上げることが出来る。

論文 1 は京都大学准教授の Nathan Badenoch 氏との共同研究の成果である。ラオス北部ルアンナムター県のチベット・ビルマ諸語の一つ、シダ語の現地調査の結果を踏まえ、その音韻論に関する分析を提示した。加えて、シダ語音韻論の歴史的発展に関する若干の初歩的な考察を行った。今後特に関連の深いアカ語諸方言やチノ語との比較研究がますます必要となることがわかった。

論文 2 はラオス北部ルアンナムター県ムアンシン地区のチベット・ビルマ諸語の一つ、アカ・ブリ語の現地調査の結果を踏まえ、その音韻論に関する分析を提示した。アカ・ブリ語の話者にも漢語雲南方言を話す二言語併用話者がいるが、この調査ではラオ語を中心に使用しながら、基礎語彙を収集した。本論文は付録として基礎語彙のうち約 500 項目を掲載した。

論文 3 はチノ語悠楽方言の名詞句構造とそれに関連する現象についての記述・分析を進めた。チノ語悠楽方言は他のチベット・ビルマ諸語と同じく SOV でありながら、形容詞類が名詞に対して後置修飾する現象をもつ。チノ語悠楽方言の形容詞がその引用形式において名詞的性格をもち、名詞句構造の内部に配置されることなどから考察すると、形容詞はあくまで統語的には主名詞と同格関係をもち、いわゆる統語的な修飾関係を結んでいるわけではないという分析を試みた。このことにより長年言語類型論的な問題となっているチベット・ビルマ諸語における形容詞の後置現象問題に対して一つの解答を与えることとなろう。

論文 4 はチノ語の悠楽方言および補遠方言の摩擦音の歴史的な発展について分析を行った。多くのチベット・ビルマ諸語では歯音(s, z)を中心に数個の摩擦音しか有しない。しかしチノ語の悠楽方言は合計で 10 個存在する。一方で、方言関係にある補遠方言では悠楽方言にみられる有声音の摩擦音が見られない。本論文ではまずチノ語方言間の摩擦音の対応関係を整理したうえで、他の同系諸語との間にみられる音対応をふまえ、チベット・ビルマ祖語の段階からの発展を論じた。また漢語やタイ・ルー語との接触による摩擦音の導入についても十分な説明ができた。

論文 5 はラオス北部ルアンナムター県ムアンシン地区のチベット・ビルマ諸語の一つ、ロロ・ポ語の現地調査の結果を踏まえ、その音韻論に関する分析を提示した。中国雲南省から移動してきた漢族との共住村に住むことから、ロロ・ポ語の話者の多くは漢語雲南方言も話す二言語併用話者である。ラオ語・漢語雲南方言の両言語を使用しながら、収集した 500 項目の語彙についても併せて公開した。

論文 6 はチノ語悠楽方言の形容詞の記述を行い、その意味的分布の分析を行ったものである。東南アジア大陸部の諸言語ではいわゆる「形容詞」を独立した統語範疇としてみなさず、動詞類の中に含めることが多い。チノ語悠楽方言では[a-/ la-/ jɔ-+語根]で構成される語を形容詞として認定できる。本論文ではその統語的特徴と意味的分布について整理し、言語類型論や地域言語学的観点からチノ語悠楽方言の形容詞の特異性を記述することに成功した。

学会発表については 5 節にみる 8 件であるが、ここでは関連するものをまとめて、簡潔に要旨を述べたい。

発表 1 は直近に行われた The 49th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics への参加報告であり、現在のシナ・チベット諸語研究動向を整理した。京都大学の藤原敬介氏、岩佐一枝氏との共同発表である。

発表 2 と発表 6 は同一言語が国境をまたいで話されている事例を報告し、その方言間の比較を行ったものである。発表 2 はラオスのルアンナムター県のロロ・ポ語と中国雲南省の南華県で話されるロロ・ポ語の比較を行い、両者はあきらかに方言関係にあることを確認した。また発表 6 は中国とビルマで話されているアク語(Akeu)の比較を代表者自らの調査データで行った。

発表 3, 4 および 5 は代表者が行ったアカ系諸語(Akoid)の言語調査データの比較研究の成果の第 1 段階の報告に相当する。チベット・ビルマ系言語であるアカ語の諸方言とプノイ語・ロロ・ポ語・チノ語・シダ語などを比較し、各言語の音韻における歴史的発展を分析した。そのうえで、特に発表 3 では言語の改新性の進度を評価するモデルを提案した。

発表 7 はチノ語補遠方言の名詞句構造に関する初期報告を行った。チノ語の悠楽方言と同じく、[指示詞＋名詞＋形容詞＋数詞-類別詞]の構造を持ち、本発表では各スロットに入る要素の具体例について説明を加えた。また悠楽方言と異なり、補遠方言では形容詞あるいは数詞-類別詞のスロットが名詞の前に来る例も許されることが多く、今後の言語変

化では名詞の前に置かれる構造に移行していくのではないかという推測を立てた。
　発表８は論文１の前段階となる発表であるので省略する。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

[1] Badenoch, Nathan and Hayashi, Norihiko 2017. Phonological Sketch of the Sida Language of Luang Namtha, Laos. *Journal of the Southeast Asian Linguistic Society.* Vol.10.1. pp. 1–15（査読有）

[2] Hayashi, Norihiko 2016b. A Phonological Sketch of Akha Buli ---A Lolo-Burmese Language of Muang Sing, Laos---.『アジア言語論叢 10』pp. 67–98. 神戸: 神戸市外国語大学外国学研究所.（査読なし）

[3] 林範彦 2016a.「チノ語悠楽方言の名詞句構造とその周辺」池田巧（編）『シナ＝チベット系言語の文法現象 1: 名詞句の構造』pp. 73–94. 京都: 京都大学人文科学研究所.（査読なし）

[4] Hayashi, Norihiko 2015b. Origin of Jino Fricatives. *Bulletin of Chinese Linguistics.* 8:61–77. Leiden: Brill.（査読有）

[5] 林範彦 2015a.「ロロ・ポ語音論の予備的研究」大西正幸・千田俊太郎・伊藤雄馬(編)『地球研言語記述論集 7』 pp. 171-205.京都: 総合地球環境学研究所.（査読有）

[6] Hayashi, Norihiko 2014. Youle Jino Adjectives and Their Semantic Mapping.『神戸外大論叢』第 64 巻第 3 号: 9–22. 神戸: 神戸市外国語大学研究会.（査読なし）

〔学会発表〕（計８件）

[1] 岩佐一枝・藤原敬介・林範彦 2016c.「第 49 回国際漢蔵語学会報告」(チベット＝ビルマ言語学研究会第 40 回会合、神戸研究学園都市 UNITY、兵庫県神戸市、2016/11/19)

[2] Hayashi, Norihiko 2016b. Two Lolopho Dialects in Laos and China. Circulated at the 49th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, Jinan University (Guangzhou, China/ 13th, November, 2016).

[3] 林範彦 2016a.「フィールド調査から言語の変容をとらえる」(京都大学言語学懇話会第 101 回例会、京都大学文学部、京都府京都市、2016/7/9)

[4] 林范彦 2015c.〈彝缅语的跨境比较〉(藏缅语· 侗台语研讨会，神户学园都市 UNITY，兵庫県神戸市、2015/10/24)

[5] 林範彦 2015b.「アカ系諸語(Akoid)の言語特徴とその諸問題---下位分類をめぐって---」(チベット＝ビルマ言語学研究会第 36 回会合、京都大学文学部、京都府京都市、2015/7/4)

[6] Hayashi, Norihiko 2015a. Two Akeu Dialects in Myanmar and China. Circulated at the 25th Annual Conference of Southeast Asian Linguistics Society (Payap University, Chiang Mai, Thailand/ 29th, May, 2015).

[7] Hayashi, Norihiko 2014b. A Sketch of Noun Phrase Structure in Buyuan Jino. Circulated at the 47th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, Yunnan Normal University (Kunming, China/ 17th, October, 2014).

[8] Badenoch, Nathan and Hayashi, Norihiko 2014a. Phonological Sketch of the Sida Language, Luang Namtha. Circulated at the 24th Annual Conference of Southeast Asian Linguistics Society (Yangon University, Yangon, Myanmar/ 31th, May, 2014).

６．研究組織
(1)研究代表者

林　範彦（HAYASHI, Norihiko）
神戸市外国語大学・外国語学部・准教授
研究者番号：40453146

以上。